

# 〈女性の身体〉を奪還する少女

——山田詠美「風葬の教室」と一九八〇年代のフェミニズム動向——

有田和臣

- 一 「いじめ」をめぐる社会状況
- 二 不可解な三つの設定——不良、軽蔑、欲望
- 三 下着がになう〈性的身体〉の表象
- 四 トイレ、および生理用品にかかわる穢れの意識
- 五 〈女性の身体〉を奪還する少女たち

転校生杏がクラスメイトたちからいじめを受け、いったんは自死を決意しながらも翻意して反撃に転じ、主体的に教室の空気を支配するに至る過程は、一九六〇年代から、とりわけ一九八〇年代にかけての欧米におけるフェミニズム動向、ひいては日本におけるそれと連動関係を見せている。杏のたどった、自己を取り巻く状況への反撃と自立の道筋が暗示する真の焦点は、女性の身体、とりわけ男性の視線を介した価値観によって抑圧されてきた性的身体を、女性の主体のもとに奪回するところにあつたと考えられる。

## 一 「いじめ」をめぐる社会状況

『文藝』一九八八年春季号に発表された山田詠美「風葬の教室」<sup>①</sup>は、小学校五年生の少女、本宮杏が転校先でいじめにあい、自殺を決意するまでに思いつめながら、翻意し、さらに教室で優位に立つに至るまでを描く。背景には、当時、学校内でのいじめが大きな社会問題となり、いじめを原因とする少年・少女の自殺報道も相次いだ事実があったと推測される。とりわけ一九八六年二月、東京都中野富士見中学二年生の少年が首つり自殺をとげた事件では、クラスメイトたちがこの少年の「葬式ごっこ」を行った際、悪ふざけで追悼の寄せ書きをした色紙に担任教師ら四名の教員も署名し、いじめに加担していたことが話題となった。この四名には、日頃生徒への面倒見がよいとされていた教員や、授業に熱心なことで定評があった教員も含まれていた点が世に衝撃を与えた。<sup>③</sup>

杏の転校先の学校の担任教師も、学級委員の恵美子を中心とするいじめに加担する。クラス中が杏に寄せる「嫌悪の波」を感じ取った女教師は、本能的に「教室での彼女の立場を快適なものにする」ため「子供たちに迎合」する道を選び、事あるごとに杏を叱り杏を「否定する言葉を口に」し始める。自身も、「教室の部品」として周囲に溶け

込むことによつて「退屈な平和」を得る、「水のような人生」を望んでいた杏は、その状況を次のようにとらえる。

彼女を憎むことは、私には出来ません。私が水のような人生を望んだのと同じように、彼女も波に逆らわれない安楽な生活を望んだのですから。

もともと特段の悪意を持たない者までもがそこにある「空気」に従い、いじめを増幅していく様子を観察する杏の内心の言葉はそのまま、中野富士見中学事件への批評となり得る。

いの中の電話理事を務める稲村博は、いじめ問題の特集した教育誌『月刊生徒指導』（一九八一年五月）に寄稿した文章で、いじめの常套的な方法六項目を挙げている。

「集団での無視」、「仲間外れ」、「ボスへの屈服」（ボスの意向に従つて特定の子をいじめる）、「暴力」、「たかり」、「からかい」（侮辱的な言葉）がそれで、六項目のうち「たかり」以外のすべてが杏の受けたいじめと重なっている。稲村はまた、「いじめられるほうは、一般にいじめられることにきわめて忍耐性がなく、すぐ死を思いつめるような傾向が強く認められる」と概観する。

同誌同号で中学校教諭能重真作は、「現代のいじめっ子が「自己中心的」で自己「抑制力」がないのは「社会的経験」が「貧困」なためであり、いじめられる側にも、はっ

きり自己主張せず、「誰かに助けを求め」て「迫害」から逃れる努力もせず「死へ逃避してしまう弱さ」、「もつと言えば生命力そのものの弱さ」が見られる、としている<sup>5)</sup>。

杏は後に自分をいじめることになるクラスメイトたちを、「彼らのやることは、私には容易に予測がつくのです。彼らには、人生経験がたりないのです」と評している。その杏は、引越した当初に散歩した野原で、草や木の生きものとしての勢いに圧倒される思いをし、また、自分の下着（「スリップ」）を教室でさらされたことを直接の理由として死を考えるなど、生命力の希薄な少女として描かれる。野生の草木にさえ脅かされる杏は言う。

私は、自分よりも、まわりの動かない物たちの方が、はるかに生きていると感じます。（中略）私は、この時、明らかに草や木に殺されているのです。

これらの記述が同時代の学校の現実にあつたいじめをめぐる状況と対応関係を持っているのは明らかである。作者山田詠美自身もまた、かつて「風葬の教室」の杏さながらに、父親の転勤で日本各地に転校を繰り返し、「標準語」であるゆえに「最初はちやほやされ」、やがて「気取っちゃって」といじめられ、それが毎回恐ろしいいじめにエスカレートしていった経験を告白している<sup>6)</sup>。これも杏の遭遇した経験そのものであり、さらに「風葬の教室」を執筆し

ていたころの山田詠美がその作風や異性関係に関わるスキヤンダル報道の渦に巻き込まれていた事実、いわば文壇ジャーナリズムによる「集団いじめ」を受けていた事実を考え合わせれば、自分を排除しようとしたジャーナリズムに対する諷刺と受け取り得る題材と発表のタイミングだったと見ることもできる。

結果として、「風葬の教室」は、詠美に対するそれまでのネガティブな風評を一掃するほどの評価を得た<sup>8)</sup>。ただし、その要因は、右にあげたようなローカルな事情に根差す側面のみ存するわけではないだろう。同時代の状況や実験を映し込みつつ、それらへの諷刺的なメッセージを発信する側面を、おそらくこの作品は意図的にもっているのだろうが、そのメッセージ性は、いじめ問題という日本ローカルなトピックを超えた射程をもっていると考えられる。

杏という少女がいじめに抗しつつ体現する生き方の選択は、一九六〇年代から一九八〇年代にかけての欧米におけるフェミニズム動向、ひいては日本におけるそれと連動関係を見せており、杏の、自己を取り巻く状況への反撃と自立が暗示する真の焦点は、そこにあると見ることができ。女性としての〈身体〉の尊厳と主権を、男性中心の視線と価値観の側から奪還する姿勢を鮮明にした物語として、またデビュー作「ベッドタイムアイズ」（一九八五年）以来、

詠美への文壇の評価をためらわせる要因となってきた性描写が真に指向するところを明らかにして見せた物語として位置づけられてこそ、この作品が表象するメッセージ性の真の姿が整合的にとらえられ得るだろう。そのようにとらえることによって、この作品が描く不思議ななりゆきの意味を理解することもできる。

## 二 不可解な三つの設定——不良、軽蔑、欲望

そもそも「風葬の教室」は奇妙な作品である。一見、当時の学校に多発していたいじめを題材とする、その意味でどこにでもありそうな日常性を帯びた物語であるように見えて、そうではない要素を多分に含んでいる。当初、自らの主体的な存在感の表出を忌避し、水のように周囲に溶け込んで生きることを望んでいた杏は、その点ではどこにでもいたであろう、典型的な「生命力そのものの弱さ」をもつ小学五年生だった（性格的には、クラスメイトたちの幼さを見抜く大人びた達観を見せる少女ではあったが）。しかし杏が、学級委員恵美子を中心とするクラスメイトたちによるいじめを受けながらも反撃に転じ、主体的に教室の空気を支配するに至る過程で、何を支えにし、どのような方法をとったかについては、いくつもの不可解な部分を残している。

まず、杏の生きる意志を支えたものについて。いったんは死を決意した杏が翻意するきっかけとなったのは、居間から聞こえてきた、母と高校二年生の姉との会話だった。姉は、セックスが下手なボーイフレンドと別れたいと言い、杏は「これが母と娘の会話でしょうか」とあきれる。さらに杏が受けているいじめに話が及ぶと、自分も「小さい頃、よくいじめられた」という姉は、「いじめつ子連中をひとりひとり殺していった」と告白する。「まさか、本当に殺しやしないわよ。自分の心の中で殺し行つたのよ。ひとり死に、二人死に、全員が死んだ時には、私、クラスの人気者になってたわね。」と続け、「悪は滅びるように出来てんだからさ」と結論づける。

「高校生が、お酒飲んで煙草吸ってセックスするのは悪じゃないわけ？」

「そりゃ、世の中の道理つてもんよ、ママ」

「杏は大丈夫かしら」

「明日あたり、シュークリームでも焼いてあげれば？」

「そうね。カスタードと生クリームとどっちがいいかしら」

これらの「お喋り」を聞いて杏は、「もしも、明日、シュークリームを焼いた時に、私がいなかったら、あの人が

ちはどうするのでしょうか。」と考え、「後に残された人々のことを考えると恐怖で体が震え」るに至り、「これじゃあ、死ねない。」と思うのだ。

なぜ、「お酒飲んで煙草吸ってセックスする」高校生、つまり、多くの社会的タブーを犯す不道德な女子高校生が、杏の決意を翻意させる力を持つのだろうか。小学校を舞台とする、しかもいじめを中心的な主題とする作品に性描写はそぐわないように思われるが、この作品には、必要な要素として配置されていることが明らかである。たとえば恵美子たちに対する反撃力を身につけるに至った杏は、いじめ行為に対して次のように反応する。

でも、私は傷つきません。私は微笑むことすら出来ません。だって、私の家には、シュークリームを焼く匂いが漂っているのですもの。不良の姉が、堂々と男の子と寝た話をするくらいに素敵なのですもの。

ほかでもない、「堂々と男の子と寝た話をする」、「不良の姉」が、杏の気持ちを支えているのである。そしてその、不道德な性の話題は、洋菓子である「シュークリーム」を自宅で焼く母親という、いかにも清純な少女が好みそうな、かわいらしく瀟洒な印象を与える家庭描写とセットになっている。未婚の青少年による性行為をロマンティックなイメージの衣で包むような状況設定の仕方、言い換えればセ

ックス（性行為という意味での）に付随する不道德なイメージを意図的に払拭するような状況設定の仕方は、高校生を登場人物とする詠美作品（「蝶々の纏足」一九八六年、「放課後の音符」<sup>キイト</sup>一九八九年、「僕は勉強ができない」一九九三年など）に繰り返し試みられているものであり、そこには一貫した意図があると思われる。

禁じられている煙草を吸い、お酒を飲み、セックスをしてその行為を隠さない女子高校生の姉についての記述は、「風葬の教室」の随所にちりばめられている。杏は「そんな姉が大好き」であり、数々の社会的タブーを犯すこの姉の行為が杏の生きる力を生み支えているという不可解な設定が、この作品に、「いじめ」には限定されない真の主題があることを暗示する。

不可解な記述はほかにもある。杏の、いじめに対する反撃方法である。杏が恵美子たちに対して反撃に転ずるきっかけとなった、理科を教える男の先生の話に対して、杏は的外れとも取れる反応を示す。杏が反応したのは次のような言葉である。

「二酸化炭素を沢山吐き出している奴は蚊に刺されやすいんだ。ほら、先生の手を見てみる。虫刺されだらけだろ。お酒や煙草ばっかやってるからだ」

なぜ「お酒や煙草」が繰り返し現れ、強調されるのか。

杏は、「姉なんか煙草も酒も、どんどんたしなんているけど、蚊に刺された跡など、どこにもありません。」と「鼻白」むのだが、ここに、「お酒や煙草」をたしなむといった不道徳性を帯びた行為、または杏の姉の場合には高校生でありながらそうするような社会の規範・慣習から外れた行為に及ぶ者が攻撃誘発性を持つている事実、さらに姉がそれに対する反撃力をすでに身につけ、もはや攻撃を受けることがなくなっている事実の暗示を読み取ることができると。虫刺されだらけの先生に生徒たちが「先生、可哀想！」と声を上げると、先生は「何が可哀想なもんか。」と返す。

「先生は蚊に刺されるのが楽しくてたまらん。だから、お酒も煙草も止めないんだ。」

気持ちよさそうに血を吸って満腹した蚊を叩きつぶすのが楽しみなのだという先生は、腹を赤く膨らませた蚊をつぶす過程を迫真の描写で生徒たちに語る。先生の言う、自分を刺した蚊をつぶす行為の楽しさが、姉の言う、いじめをしかけてきた相手を「心ん中で殺」す行為を読者に想起させる仕掛けとなっており、実際のところ杏は「いじめっ子をひとりひとり殺して行った」という前夜の姉の言葉を思い出し次のように反応する。

私の頭は、がんと鳴り続けていました。心の中に

立ち込めていた霧が急速に晴れてゆくのを感じます。何故、こんなことに気づかなかったのでしょうか。昨夜の私は、余程、動転していたと見えます。何も自分が死ぬことはないではありませんか。

大きな発想の転換が、杏の中で起こったこと、反撃のための重大な鍵を杏がついに見出したことを示す描写である。杏は「私の生み出した人の殺し方は、軽蔑という二文字だったのです。」「いつでも殺人を犯せる能力を持っていると思うことは、私の生き方を変えました。」と語る。

しかし暴力を伴う熾烈ないじめに、いじめっ子連中を心の中で殺す、という杏の姉の対処法も、「軽蔑」するという杏の対処法も、それ自体は反撃方法としてはあまりに軽すぎるのではないだろうか。そのような、単なる自分の心の持ち方のみの「反撃」に実効性を期待しうるものか疑問をもたざるをえない。「何も自分が死ぬことはない」と思い至った点には事態の好転を見ることができ、蚊をつぶす行為に相当する強力な反撃の要素が見出せないのだ。

具体的な杏の反撃行為が示されていないわけではない。自分（杏）に好意を寄せる吉沢先生の気持ち（それは、吉沢先生にあこがれる恵美子が杏に対するいじめを開始するきっかけとなったものでもある）を刺激するふるまい、しぐさをわざとして、恵美子たちを苛立たせること、恵美子

たちにいじめられることによって、ますます杏を守ろうとする吉沢先生の気持ちをも自分にひきつけ得る事実を恵美子たちに見せつけること、など。しかしそれは、心の中で殺すこと、軽蔑すること、という杏の手に入れた反撃方法の実現例としては、少なくともダイレクトにはイメージし難い。つまり、杏の命を救うことになった重大な発見であり、物語の核心にかかわるだろうはずの、肝腎のいじめへの対処法、反撃方法がほとんど具体性をもっていないという不可解さが残るわけである。

反撃に転ずる杏の変化を描写する場面には、もうひとつ、不可解な、そしておそらく最も重要な要素がある。死まで考えた杏が「こらえ切れない笑みが口許を緩ませる」ほどの解放感を得たあとに、次のような変化を見せる。

アッコの上履きは汚れています。先週、持ち帰って洗わなかったのでしょうか。駄目ねえ。私は、そう思い、それに触れたい欲望に駆られました。その瞬間、私が入れられていた教室という牢獄は、みるみる内に色を変えて行きました。欲望。これ以上の人間が生きていることの証しがあるでしょうか。(中略) 私は自分が、動物ではなく、人間であったのだということを実感していました。

「軽蔑」という反撃方法とともに杏が得たものが「欲

望」である。これは、作品冒頭部の「私は学校に来るお客さんが履くスリッパを履かされています。私は、本当はスリッパの中のばい菌が怖い」という記述と対応する。「スリッパの中のばい菌」が恐かった杏に、なぜ、好きな男の子の「汚れ」た上履きに触れたい「欲望」がきざすのか。この点も明示的には説明されず、物語の不可解な要素として残されている。

ここで言えることは、この「欲望」の自覚を期に、杏は周囲の「空気」に迎合する姿勢を反転させたということだろう。それによって自分を抑圧する「空気」、すなわち恵美子らの側の価値観への従属から解放され、自らの内にある価値観（それは不道德な行為と密接にかかわっている）を信ずる自信を得ることによって、生きる力を取り戻すに至る。ここにある、杏の側の価値観と、恵美子らの側の価値観のせめぎあい、両者の覇権争いの綱引きは、「いじめ」の物語の外部にある、より大きな主題と連動している。その様態を確認することによって、「欲望」の正体を明確化し、その他の設定の謎についてもまた、明瞭化することができるだろう。

### 三 下着がになうへ性的身体への表象

端的に言えば、「風葬の教室」に配置された、いじめに

かかわるアイテム群は、一九八〇年代の女性たちが置かれた社会的な立ち位置を象徴する記号性を持っている。それらのアイテム群に付随する負のイメージを正の側に転換しようとする杏のストーリーが、この時代の一群の女性たちが目指した自立と成熟への道筋と連動していると考えられる。

杏に死を決意させたのは、杏の下着であるスリップを背後から杏の頭にかぶせて、人前にさらすといういじめ行為だった。なるほど盗まれた自分の下着をさらされることは恥ずかしいことには違いないだろうが、そしてそれまでのいじめが積もり積もったうえのことではあるかもしれないが、それでも死を決意する理由としては軽過ぎるという印象をもたざるを得ない。杏が生命力薄弱な少女だったとしても、なぜ下着が自死のきっかけになるのか。疑問を解く手がかりとして、杏の下着は、通常の（少なくとも杏の周囲の）小学生のそれとはやや異なる属性を持っている事実があり、そこには重要な指標が暗示されているようだ。

私は、母親の趣味で、いつも小さな花の付いたスリップや、それとおそろいのショーツなどの愛らしい下着をつけているのでした。そして、それらは女の子たちの憧れの的でした。

まわりの小学生女子が身につけているものとは異なる、

この「愛らしい下着」が、状況が変わった途端、いじめの標的となる。昨日まで杏をちやほやしていた男の子たちの一人の言葉「女くせえんだよ」から始まり、ほかの男子たちも、「おまえ、男つたらしの下着、着てるんだってなあ」、「男好きだって、女子が言ってたぞ」、「よく恥ずかしくないよなあ」と、陰湿なからかいの言葉を杏に投げかける。杏は「母親の趣味」でそれを身に着けているまで、男子や吉沢先生にそれを見せるわけでもない。しかし、彼らにとって魅力的なものとなりうるのが他の女子生徒たちの嫉妬をかい、その裏返しとしての攻撃を誘発する。

こうした、本来他人には見せないはずの下着に装飾性をもたせる現象を、桜井厚「下着——性と生を支配するもの」は、女性たちの意識革命を映す、欧米およびそれと連動する日本の流行として紹介する。「八〇年代」にはいった頃「下着の一部を出す外に出すファッションが若者に流行」し、「一九八五年には、色柄やフリルのついた華やかな下着」が流行して、「下着は、外着時代」を迎えたと新聞報道までされた当時の状況に言及している<sup>9</sup>。そして、そのような流行が可能になった背景に、「女性が自分の身体を性的対象物から自己へとり戻そうとする意識への、ラディカルな転換」があったこと、「男性の視線」に拘束されてきた女性の身体の、「女性の側への奪回」という「鋭



「問題提起」の気運があったことを指摘している。つまり、自分たちの身体への装いを、男性の性的視線に訴えるものだからへふしだら〜だとするような男性目線を基準とした自己規定を、拒否する姿勢の表明として、裝飾下着の流行があった。

このような気運は六〇年代以来、ミニスカートの流行等とともに欧米の女性たちの間に醸成されてきたものであり、典型的なエピソードとして桜井は「フェミニズム運動の興隆とともに、六〇年代の後半の終わりにニューヨークではじま」った「ノーブラ運動」での、次のような出来事を紹介する。

ワシントンではTシャツ姿の女たちが、ノーブラの胸を男性上院議員の鼻先に突き出し、「さわるな。これ  
は私たちのものであって、もはやあなたたちのものではない」と叫んだという。<sup>①</sup>

ノーブラやミニスカートの流行は、そこに性的な表象（男の視線への媚）を看取するだろう男性視線を經由して女性が自己評価を決定するような認識システムを拒絶し、「女性が自分の身体管理権を実質的に獲得」しようとする姿勢のひとつの発露だった。桜井はこの流行の延長上にある、見せることを前提とした（しかし男性視線は顧慮しない）下着や、下着の簡略化・縮小化（後述する恵美子たち

の「でっかいパンツ」とは対照的な方向性を持つ）が、フェミニズム史において「下着の第二次革命」（第一次は、第一次世界大戦後のヨーロッパで、女性の体に即した、動きやすく機能的な下着が流行した時期を言い、これにより女性の行動の自由化が推し進められたと言われる）と呼ばれる流れの中に位置づけられることを述べている。

小学生ながら杏のつけていた可愛らしい下着は、日本でのこの「下着の第二次革命」の流れに（実際には「見せなくとも」属するものであり、その意味でたしかに男子生徒の言葉にあったような「女臭い」、言い換えれば女性たちが社会的地位奪回を試み主張してきた歴史を想起させるアイテムだった。

一方、杏をいじめる少女たちの下着はどうか。恵美子たちの話を聞いた姉は杏に言う。

「その恵美子って子、どんなパンツはいてんの」  
「普通の」

「どうせ、木綿のでっかいパンツなんでしょ。そんな子に負けるんじゃないよ。さえない下着の女なんて最低だよ。杏は、もう勝ったも同然」

なぜ、下着が勝ち負けの焦点となるのか。杏の「可愛いシヨーツ」といじめっ子少女たちの前時代的な下着との対比が、杏と恵美子たちとの立ち位置の差を象徴的に表明し

ているからだ。いじめっ子少女たちの装いは次のように観察される。

ひとりの女の子のブラウスからは黄ばんだメリヤスの下着がのぞいています。こんな女の子に、魅かれる男がいたら、お目にかかりたい。私の姉なら、そう言うことでしよう。私は、少し同情すらしめました。

あか抜けのしない古臭い下着は、「シヨーツ」ではなく「パンツ」、「ニット」ではなく「メリヤス」とわざわざ別称で記述されている。それらは「見せること」をまったく前提としておらず、したがって女性の社会的立ち位置に対する批評性は微塵も持っていない。姉が「杏は、もう勝つたも同然」と言うのは、女性としての自己主張を欠くいじめっ子少女たちが、女性としての地位向上をめざす場においては無力であることを表象している。両者の下着の対比は、女性のみずからを自己規定するに際しての主体性の有無を表象していると考えられるのだ。

改めて確認しておけば、「スリッパ」とは、いじめっ子少女たちがつけているであろう上半身全体を覆う形態の下着ではなく、肩ひもで吊るされた下着が胸から腰をおおう形態になっており、肩まわりが大きく露出するファッション性の高いものである。同時に、身につける者の性的な魅力を喚起する傾向の強い下着でもある。その点が、

男性視線に媚を売るへふしだらなもの」として、恵美子らの羨望とその裏返し of 攻撃の対象になった。

杏がスリッパを頭からかぶせられたとき、杏には、「スリッパに付いているお花模様しか見えない」状態になる。「今、私に覆いかぶさっているのは、私自身の下着なのです。あの花柄の、可愛らしい。」と、記述はたまたまかける。この、下着の、「可愛らしい」装飾が、いじめっ子たちの攻撃対象になっているところのものであることが、ことさらに強調される。いじめっ子たちが象徴的に攻撃している対象は、杏個人のみならず、杏が身にまとう「女性」性であり、また女性の主体的な「身体」、とりわけ「性的身体」だからだ。

それを表象する「スリッパ」を、いじめっ子たちは「男つたらし」の、つまりコケティッシュでへふしだらなもの」としてしか扱わない。彼らは潜在的に女性の身体とリわけ性的身体に負のイメージを投げかけようとする。対する杏は、それらの身体性を「可愛」い、美しいものと見る。だから、いじめっ子たちがその美しきへ女性の身体を、汚れたもののように扱い、貶めようとするとき、みずからの価値観を否定された杏は絶望するのである（杏のスリッパを教室にさらした際、恵美子の発した「見せたくって仕様がないうんだから、いいじゃんねーえ」という言葉は、見

せることを前提とした、女性の自己主張のための下着に対する攻撃を暗示するものとして、象徴的である)。

杏に対するいじめは、杏が身につけている、女性性を強調した「可愛らしい」下着をめぐるからかいから開始され、それを軸にエスカレートしていった末に、ついに杏に死を決意させた「スリッパ」事件でクライマックスを見せる。

このいじめは即物的に言えば、下着のあり方をめぐる紛争だった。そこに、当時の国内外で流行した「見せる下着」が背後にもつ女性の意識革命への暗然たる言及と批評性を読み取ることが困難ではないだろう。杏の「スリッパ」は、女性の「性的身体」をになうアイテムとしての機能を象徴的に果たしていた。

#### 四 トイレ、および生理用品をめぐる穢れの意識

次に、下着をめぐるいじめの開始とともに杏が困ったのが、「一緒にトイレに行くお友だちがいない」ことである。トイレにかかわる話題はその後二頁にわたって続き、その孤独とせつなさに杏は「絶望するような気持ちになる」。そもそも物語冒頭部分から、杏の転校に伴い「私といつも一緒におトイレにいらっていた女の子は、ひとりりでいかなくではなくなるのです」という記述が見られ、このこだわりには、トイレもまた、女性の地位にかかわる問題の表

象される場所であることが暗示されている。

島田裕巳は『私というメディア』（一九八九年）<sup>12)</sup>において、東京、大阪、京都などの公共トイレの実態調査を「女性のトイレはなぜ混むか」という視点で行っている。この調査は、女性の利用者が多いデパートをはじめ、保健所、福祉センター、図書館などの公共施設でも、所要時間は月経の処理などで女性のほうが長いにもかかわらず、便器の個数は男性用のほうが明らかに多かったと報告する（小・中学校も同様）。これは、ほとんどの企業の職場が、大多数の男性と少数の若い女性で構成されていることをそのまま公共トイレにも反映しているためだと言う。必然的に女性用トイレは混雑し、滞在時間は長くなる。ひとりで行くと待ち時間が多く、手持ち無沙汰な時間が長く、それが「せつない」ゆえんである。トイレは、ひとりで行くには気の重い場所だった。

桜井厚「トイレ——女役割を映す鏡」（一九九二年）は、女性の社会進出とともに「最近のデパートの女性用化粧室」が「豪華そのもの」となり、「生理的な欲求を満たすためだけではなく、化粧直しや着替え、赤ん坊を連れた母親の休憩所にもなる多機能な空間」<sup>13)</sup>となっているなど、「公共トイレに対する関心が次第に高まって」きていることを指摘する。しかし「ベビーベッドや物置台など」の設

置はたいへん少なく、「その数の少なさは、乳飲み子をかかえた女性の外出が歓迎されない現状を物語るかのよう」であり、また「デパートなどでは設置はされていても女性トイレだけということが多く、「いかにも子ども世話」は母親の責任であるかのようにみえる」など、問題点もあるとしつつ、トイレは「文化的産物」であり「生理的に不可欠な装置というより、なおも性別カテゴリーと深く結びついてジェンダー再生装置の機能を果たしている」と分析している。八〇年代末から九〇年台初頭にかけて、トイレはようやく、隠れた性差別の集約された場のひとつであることが、自覚されつつあったのだ。

桜井はまた「子供たちのなかで、『ゴミ』や『ばい菌』などとレッテルをはっていじめがおこなわれた事実、排除行為が不浄や穢れ意識と結びついていることを象徴的に物語って」おり、それが「人間の生理現象としての排泄を不浄や穢れとみなす観念」とつながる傾向をも指摘する。たとえば桜井が「女性にとってトイレ利用で欠かせない」ものであるサニタリーボックスに対して「一般に使われている『汚物入れ』ということばは、月経を不浄とみなしてきたこれまでの社会の性規範を象徴的に表現している」と指摘するとき、「ゴミ」や「ばい菌」おびトイレに対する不浄のイメージと、生理に対するそれとは隣り合わせであ

る。

つまり、いじめによる「排除行為」は、トイレにかかわる身体、とりわけ女性の身体に対する「不浄や穢れ意識」と容易に結びつき得る。実際に本宮杏は男の子たちから、「うんこ、うんこ」とはやし立てられ、さらに「汚れた生理用のナプキンを登校する前の机に置いてお」かれるといういやがらせを受ける。

それは黒い血に汚れていました。そして、誰かの足の間にはさまっていたことを生々しく思い出させるのかのように、両脇に皺が寄って扇形に変形していました。

(中略)

恵美子らしい声が私の耳に飛び込んできました。

「あの子、お便所なのよ」

(中略) 便所かあ。それから、彼らは本宮うんこという名を私に与えたのです。

ここに「生理用ナプキン」がかかわってくることは象徴的である。「女」のイメージとトイレとの結びつきは右に述べたような意味で強く、杏の机に使用済みの生理用ナプキンを置き、「便所」と呼ぶいじめ行為には、ある意味で合理的な一貫性がある(「トイレ」ではなく「便所」という呼称を使う点にも恵美子らの立つ前時代的な保守反動の立脚点があらわれている)。つまり、杏に対して、「お前は

汚れた『女』だ」（自己の不浄な性的身体を隠そうとしな  
いばかりか強調するような装いをしている）というメッセ  
ージを一貫して発していることになり、そこには濃密な、  
文化的・社会的に規定される性差という意味での、ジェン  
ダー意識が潜んでいると言える。

杏の次の反応には、恵美子たちの右のいやがらせ行為が、  
ジェンダーをめぐる身体イメージについての、保守勢力と  
革新勢力とのせめぎあいを表象する行為であることが明示  
されていると言ってよいだろう。

私は、汚れたナプキンの前で途方に暮れていました。  
人の血程、けがらわしいものはないのだと、私は、そ  
の時、知りました。私は、ちゃんと生理に関する知識  
はありましたし、それを汚ないものだと考えたことも  
ありませんでした。

（中略）

その人間は、生理を汚ないものとして受け止めている  
からこそ、こんなことをしたのでしょう。そう思った  
女の生理は汚ないのです。その血は生命を形造ってい  
る一部分には成り得ないのです。他人を汚すものでし  
かないのです。

要するに「女」の性とその身体性をどうとらえるか、真  
の争点はそこにあった。それを不浄、穢れ（汚れ）の意識

でとらえるのか、否か。この二者択一が、杏に対する下着  
トイレ、生理用品をめぐるいじめ行為のすべてにかかわっ  
てくる。当然のごとく、杏に「女の生理は汚ない」という  
意識はなく（性行为という意味での「セックス」を不浄の  
ものにとらえる意識も、当然、ない）、トイレと杏を同一  
視しつつ不浄のものとしてとらえようとする恵美子たちは、  
「生理を『秘すべき、恥すべき、忌むべき』ものとする通  
念」<sup>(1)</sup>にまだ囚われていると言ってよい。

天野正子「ナプキン——『汚れ』の呪縛を解く」（一九  
九二年）は、一九六一年十一月の紙製ナプキン発売が、  
「生理につきまとっていた陰湿な、汚れのイメージを変動  
させることによって、多少、誇張していえば、女たちの  
『意識革命』をひき起こした」としつつ、その後の「新し  
いフェミニズム運動（女性解放の運動と理論）」にしても、  
「その根源に、ナプキンの登場による女としての負のアイ  
デンティティ、ないしは伝統的な性規範からの解放が前史  
としてあった、といってもいいすぎではないだろう」とし  
ている。その、女性解放の歩みを象徴するような生理用ナ  
プキン（紙製ナプキン）を、女性（杏）の身体イメージを  
汚すために使用する恵美子らは、まさに保守反動勢力であ  
る。

杏に対するいじめのエピソードに配置された各アイテム

は以上のように、当時の時代状況との連動を表象する強い記号性を伴っている。杏は、フェミニズム的な表象をもつアイテムを身につけていたがゆえに、すなわち女性の性的身体を称揚するメッセージ性を身につけていたがゆえに、それを不浄のものにとらえる保守反動勢力から攻撃を受けたのだ。杏が暗に戦っていた相手は、女性の身体を負のイメージでとらえる反動的価値観、とりわけ女性の性的身体を不浄のものにとらえる反動的価値観だった。

この物語中で汚れたものとして取り扱われる生理用ナプキン、杏の呼称とされたうんこ、汚れたアツコの上履き（排泄行為を伴う身体の暗喩となり得る）は、どれも生きている人間の自然な身体活動に伴われるものである点で、互いに並列の関係にある。そうすると、あえて異性の汚れた上履きに触れたいという「欲望」もまた、女性の身体を穢れたものとして忌避する保守反動的心性への挑戦と、並行する意味をもち得るだろう。<sup>19)</sup>

杏は、女性の身体にかかわる負のイメージにこそ対抗し、それと戦う必要があったのだ。その意味で「風葬の教室」は、フェミニズム小説の正統に属すると言つてよい。杏は、女性としての身体性を抑圧しようとする恵美子たち反動勢力による攻撃を経て、女性の身体を正のイメージで受け入れる自らの価値観の正統性を自覚し、それに基づいて生き

る自信と意欲（欲望）を得る。杏が慕う高校二年生の姉が、飲酒、喫煙もすれば、男とのセックス体験を隠そうともしない若い女性である点も、保守的価値観への挑戦という方向性をまっとうするための必然であった。<sup>20)</sup> 杏が手に入れた「軽蔑」はそして、保守的価値観との訣別の姿勢を意味することになる。

## 五 〈女性の身体〉を奪還する少女たち

恵美子と杏のせめぎあいには、教室での覇権をめぐるそれのみならず、実は身体イメージの正負をめぐる綱引きでもあった。杏は、女性の性的身体を「花模様」のような美しきもののイメージでとらえる。恵美子らはそれを、黒い血にまみれた「穢れ」のイメージでとらえる。恵美子らが杏を「便所」と呼ぶのはそのあらわれで、杏が身につけた女性の身体を裝飾するような下着は、「汚れたもの」を強調するものであるがゆえに「女臭い」（ふしだらなもの）ととらえるのだ。そうした恵美子の側の価値観を拒否し、花模様で飾られた女性の身体を主張する側に、スリッパを杏に着せる母親や、公然と性体験を口にする姉がいる。身体を正のイメージでとらえるからこそ、そうするのであり、だから杏はそのような「不良」の「姉が大好き」である。

「風葬の教室」は、同じ一九八〇年代に発表された

「蝶々の纏足」、「放課後の音符」、九〇年代の「僕は勉強ができない」等とともに、詠美作品の中でも少年・少女の世界を描く一連の系列に属するものである。そしてそのどれもが、性にかかわる描写、具体的には性交渉の記述を含む。

たとえば『放課後の音符』(新潮社)は、一九八八年二月から一九八九年六月にかけて、詠美が十代の少女向け雑誌『オリーブ』(マガジンハウス)に連載した、女子高校生を主人公とする作品である。八つの短編小説群からなり、各篇はほぼ、「私」を視点人物として語られる女子高校生たちの物語である。彼女らは未成年でありながら、飲酒し、喫煙し、いずれも性体験をもつ。その意味では社会規範を脅かす「不良」でありながら、それぞれが人間の成熟をめざす自立した魅力的な女性として描かれている。杏の姉はこの、『放課後の音符』に登場する主人公少女たちの一人であると言っても違和感はない。そして全編で、性体験は美的なイメージとともに描写されている。たとえば「Crystal Silence」に登場する、南の島で性体験したマリを、「私」は次のように見る。

彼女は色々な人と恋をして来た。きっと、大人たちから見たら、とんでもない子かもしれない。彼らは、そう言うだろう。でも、どうして? 大人たちが眉をひ

そめるような女の子が、何故、こんなにも奇麗になれるの? まだ十七歳。それなのに、お酒を飲む。煙草も吸う。男の子とも寝る。そして、彼女は、私のまわりの大人たちよりも、ずっと美しい。鏡のような涙を流すことのできる人間なのだ。

ティーン女性向け雑誌に連載されたティーン向けの文章然としているが、しかしこの『オリーブ』という雑誌は「当時の少女雑誌の三種の神器だったセックス、芸能、マンガをいっさい排除」し、「少女だけの一種自閉的世界」、「少女の聖域」をつくりあげることによって、当時、「ファッションに限れば、男女を問わず雑誌史上最大」と言われる絶大な影響力を、ティーンたちに与えたものである。そこに詠美作品が「セックス」を持ち込むことに同時代への鋭い挑戦とメッセージ性があつたことについては、別稿で言及した。

注目したいのは、性に関わる身体的イメージが、きわめて明るい、正のイメージのもとに語られている点である。一見すると、まるで高校生の性体験を奨励しているかのような、*「公序良俗」*に反する不道徳な書き様である。しかし右のように明るく透明感のある表現を重ねて発せられるメッセージは、そうした見かけの不道徳性とは別の側面をもっており、それは、杏が姉の生き方を支えにしつつたど

った、自己否定から自己肯定への道筋によって、照射されている。<sup>(24)</sup>

ここには、身体、とりわけ女性の性的身体が、決して「穢れ」てはいないこと、それを明るく日差しの下で主張することにはためらいは不要であることが、主張されている。性体験を語っているのではなく、性体験を明るく語る姿を、語っているのだ。そうして、「女性の身体についての決定権」を、女性自身の手で奪還し、さらに奪還した身体にまわりついでに負のイメージ、〈穢れた身体〉のイメージを払拭し、正の側に転換したイメージを受容するように、読者を誘惑している。それは長谷川啓が言うような、女性の性を赤裸々に描いた七〇年代以降の一群の女性作家たちが「性を主体的に生き、性の自己決定権すらもつ女たち」を表現しようとした流れにおいて、とらえることができるだろう。ただし、詠美が描く性は暗くない。ここでは、従来男の視線を介してようやくとらえられていた女性の身体を、〈美しきもの〉として、女性自身の手で奪回することがめざされていると見るべきだろう。

越智和弘は『女性を消去する文化』（二〇〇五年）で、「第一次女性解放運動」である「ビクトリア朝時代の婦人運動が掲げた平等要求の中心は、なによりも参政権の獲得にあった」点で政治にかかわるものだったが、「一九七〇

年代以降のフェミニズムにおいて、まずなによりもセックスの平等を合い言葉に女たちの自由で自立した生き方が望まれた」こと、その目標は「抑圧されてきた女性のセクシユアリティの奪還」にあったこと、背景には女性たちが「長いあいだ独自の性欲を否定され、ひたすら産む性として生殖機能のみに還元されてきた事情があった」<sup>(26)</sup>ことを指摘しつつ言う。

七〇年代フェミニズムのそもそもの引き金となった根本問題、すなわちセックスを怖れ敵視する西洋文化に特有の禁欲主義を打ち破り、男が創造する規範によって消去されてきた女性そのものの本来の姿を奪還しようとして動き出した女たちの真の意図が、日本を含む非西洋地域においてはほとんど理解されないまま抽象化されてしまったのである。<sup>(27)</sup>

女性が、女性自身の性を主体的に価値づけ行使する権利を、男性的な視線の側から奪還することの中心に、セックスをめぐる主権の問題があった、そしてそれは非西洋地域には必ずしも理解しやすくはない論点だという指摘である。詠美作品が苛立たしげに、と見えるほどに女性視線の性を執拗に描いてきた理由も、そこにあるだろう。つまり詠美は「セックス」を描いたのではない。女性みずからのセックスを、誰にも抑圧されることなく自由に女性みずからが



語るその姿こそを、描き続けたのである。そうする権利を、苛立たしく主張してきたのだ、とも言える。

杏が、やがて姉のように「不良になることを運命づけられ」ている、と記述されるのはきわめて象徴的である（作品中でその理由は一切明示されていない）。なぜ運命づけられているのか。杏が、みずからの女性としての身体に対する肯定的価値観を崩さない限り、そして恵美子ら周囲の人間たちがそれへの否定的価値観を保持し続ける限り、彼ら、彼女らから見て杏は「不良」とならざるを得ないからだ。

杏はそうした、女性みずからの身体を卑下する卑屈な価値観への「軽蔑」を手に入れ、本来あるがままの女性であろうとする「欲望」を手に入れて以後、当初は隠そうとしていた自分の女性としての魅力（小学校五年生ではあるが）を行使することのためにためらいを無くす。女性としての魅力を欠く恵美子たちに、むしろ見せつけるほどになる。このような杏が、「不良」ではなくなるときが、女性が女性であることへの否定的価値観から解放されるときである。

杏やマリはこうして、美しきへ女性の身体を回復し、それを獲得した風景を臨み見る存在である。杏が風葬の地に葬り、それへの関与を拒絶して放置するのは、へ穢れた身体へあるいは自分たちの身体性をへ穢れへのイメージで

とらえる保守的なジェンダー観に囚われた女性たちの卑屈な心性である。杏たち、あるいは詠美作品の少女たちが風葬の地の先に臨み見るのは、反動的抑圧から解放された女性たちの美しき身体であろう。

#### 注

- (1) 山田詠美『風葬の教室』河出書房新社、一九八八年三月以下、『風葬の教室』よりの引用は同書による。
- (2) たとえば一九八六年二月二日付け朝日新聞朝刊記事「いじめ、十五万五千件（昭和）六〇年四月〜十月、全国公立校調査」（一）内は論者による補足）には、「文部省」の実施した「全国約四万の公立小、中、高校すべて」を対象とする「総点検」の結果、「昨年四月から十月までの七カ月間に、五五・六％に当たる二万一九九校で十五万五〇六六件のいじめが起きていた」と報道している。
- (3) 「中野富士見中『葬式ごっこ』四人の教師 き然とした指導できず」一九八六年三月二十一日、朝日新聞朝刊
- (4) 稲村博「現代のスケープゴート——いじめられっ子」、月刊生徒指導 集団いじめ 学事出版、一九八一年五月、十六頁
- (5) 能重真作「集団いじめの意味するもの」、月刊生徒指導 集団いじめ 十一頁
- (6) 神崎京介（聞き手）「山田詠美 連続インタビュー いつも片隅で本を読んでいた」、『文藝』二〇〇五年秋号、八月一日刊
- (7) 拙稿『ベッドタイムアイズ』における小説言語の獲得

——山田詠美・小林秀雄の〈肉体〉と〈言葉〉」（『稿本近代文学』二〇〇八年十二月）に詳細を述べた。

(8) 拙稿「研究動向 山田詠美」（『昭和文学研究』二〇〇五年九月）でこの経緯に言及した。

(9) 桜井厚「下着——性と生を支配するもの」、天野正子・桜井厚『モノと女』の戦後史 身体性・家庭性・社会性を軸に「有信堂、一九九二年九月、五六頁（二〇〇三年三月、平凡社ライブラリーとして再刊、引用は友信堂版）」

たとえば「読売新聞」一九八四年二月二八日朝刊の記事「下着上陸 カラフルに仏、米から」には、最近の下着には「カラフルなものがめだってきていて」、「色、柄ともなかなかセクシー」とある。同紙一九八四年五月一八日朝刊記事「下着も軽薄短小の歩み」は「下着が小さく、軽くなった」こと、一九八五年五月二二日朝刊記事「街着感覚の下着が増えています」は、「昨年あたりから下着の『街着化』が急速に進んでいる」こと、「下着と街着の境目がなくなってきている」ことを報じている。

(10) 「下着——性と生を支配するもの」五八頁

(11) 同 五五頁

(12) 島田裕巳『私というメディア』パーソナルメディア、一九八九年三月、一八九〜二二一頁

(13) 桜井厚「トイレ——女役割を映す鏡」、『モノと女』の戦後史 身体性・家庭性・社会性を軸に「一七六頁

(14) 同、一八九頁〜一九三頁

(15) 同、一九一頁

(16) 日本のウーマン・リップ運動の「代表的存在であった田中美津」は、「便所からの解放」（一九七〇）という「衝撃的な夕

イトルのパンフレット」において、「女性のラディカルな自己意識を通してのみ、その主体形成の可能性が開かれることを、力強く宣言」している。次の如く。

〈母〉か〈便所〉かは、ひとつ穴のむじなであり、どちらに見られようと本質的には同じことなのだを知る時、女は男に、権力に居直る。その時、いままで男を媒介に作りあげられてきた権力好みのカワイイ女は、自らの性を足がかりに主体性確立への視点をつかむ。その時女は、女を便所化することで成り立っている支配権力と対峙する。（大越愛子『フェミニズム入門』ちくま新書、一九九六年三月、一三〇頁）

(17) 天野正子「ナブキン——『汚れ』の呪縛を解く」、『モノと女』の戦後史 身体性・家庭性・社会性を軸に「六七頁

(18) 同

(19) 『フェミニズム理論辞典』の「Dance 欲望」の項目には、「本質的欲望の一つであり、それが社会的に構成されたものがセクシュアリティである。（中略）歴史的には、女性の欲望は結婚と家族の領域に制限されてきた。フェミニズム理論がめざすのは、女性の性的欲望とその社会的表現形態を理解し、再定義することである。一九八〇年以降、フェミニストたちの関心は、歴史や精神分析的な説明へとむかっている。」とある（マギー・ハム著、木本喜美子・高橋準監訳『フェミニズム理論辞典』明石書店、一九九九年七月）

(20) 杏の「不良」の姉はお酒も煙草もたしなむ。藤田和美「女性作家と喫煙表現」（二〇一一年）は、作家たちへのインタビューに基づき、「女性作家に喫煙者が多い一因として、彼女たちの教育水準の高さ」があったと指摘する。

「たばこは女に好ましくない」といったジェンダー規範が社会の風潮としてあったからこそ、知的能力によって性差の壁を越えて自己表現を図ろうとした女性は、喫煙に関する規範を女性差別の一つととらえ、これに反発して喫煙を行う傾向があった。(館かおる編『女性とたばこの文化誌——ジェンダー規範と表象』世織書房、二〇一一年四月、三八〇頁)

(21) 山田詠美『放課後の音符』新潮社、一九八九年十月、九二頁

(22) 山崎浩一「ヘオリープ少女」の研究、『週刊文春』一九八六年十月二三日〜十一月六日、水牛くらぶ編『モノ誕生』『いまの生活』晶文社、一九九〇年四月、四四八頁

(23) 拙稿「山田詠美『放課後の音符』の位相——女子高生ブームと「ニュー不良」の自立」、『稿本近代文学』一九九九年十二月

(24) 女性性を「穢れ」ととらえ、それを抑圧しようとする恵美子たちに対抗する杏の生き方は、「ジェンダーを基礎に」『男』階級よりも女性階級は劣等であるという位置づけをした。「男性優位主義の展開」として行われる、「あらゆる形態」の「女性への抑圧」の解体を目指す「ラディカル・フェミニズム」の潮流に属する(『フェミニズム理論辞典』、「ラディカル・フェミニズム」の項)。「一九六〇年代後半半アメリカで登場し、ヨーロッパ諸国や日本に急速に波及」したこの潮流は、「第二波フェミニズムの源流」とされ(『岩波 女性学事典』岩波書店、二〇〇二年六月、「ラディカル・フェミニズム」の項)、日本でも「八十年代」にこうした「欧米のフェミニズム理論の受容が進み、フェミニズムということばも一

般化した」(『同事典「フェミニズム」の項)。

(25) 長谷川啓「セクシュアリティ表現の開化 フェミニズムの時代と森瑤子・津島祐子・山田詠美」、『リブという〈革命〉——近代の闇をひらく』インパクト出版会、二〇〇三年十二月、一〇七頁

(26) 越智和弘『女性を消去する文化』鳥影社、二〇〇五年四月、六二〜六五頁

(27) 同、七〇頁